

琉球大学学術リポジトリ

ニューカレドニアの語りびと

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 沖縄移民研究センター 公開日: 2018-11-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐藤, 幸男, Sato, Yukio メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002010092

ニューカレドニアの語りびと

佐藤 幸男

鉱山資源であるニッケルは日常生活用品に不可欠な素材のひとつであることに今も昔も変わらない。この資源を求めて、人びとは鉱山の奥地、高地、深部へ掘りすすみ、開発に励んできた。Yann Bencivengo, *Nickel: La naissance de l'industrie calédonienne* (Presses Universitaires François-Rabelais, Tours, 2014) は、ニューカレドニアのニッケル産業発達史を著した好書である。この本ではニューカレドニアを舞台に繰り広げられているニッケル開発の歩みを丹念に追うなかで、日本（人）の足跡にも詳細に記述し、小野弥一をはじめとして小林忠雄の著作にも言及している。ニッケルを媒介にして繋がりあった日本とニューカレドニアとの関係の過去と現在、そして将来を展望するうえでも貴重な著作である。世界最大級のニッケルプロジェクトは、現在も日本の住友金属鉱山（株）や三井物産が権益を取得して参入しているが、ここにいたるまでの苦難な道のりを知る者は少ない。ましてや、移民、難民、出稼ぎ労働、外国人労働者など、人の国際移動、越境移動にまつわる言説が「負のイメージ」として語られることが多くなってきた昨今、日本とニューカレドニアのかかわりを、さらには太平洋世界とのかかわりを、人びとの歴史として誰かが記録しないと忘れられていくことになってしまう。

太平洋という記憶の海をさまよい、忘れられた人びとの忘れられない物語をニューカレドニアに見いだしたのは、市井の研究家小林忠雄である。小林著『ニュー・カレドニア島の日本人』（1977年）と「小野弥一伝：第一回ニュー・カレドニア島邦人契約移民総監督」『仏蘭西学研究』14号（1984年）は、日本とニューカレドニアとを結ぶ移民調査研究に大きな足跡を残している。この研究に促されて、たとえば、石川友紀¹⁾や大石太郎²⁾らの日本人移民の研究が生まれた。さらに、ニューカレドニア移民研究に関して特筆に値するのは、写真家津田睦美による精力的な映像資料を通じて日本人の物語が描きだす作品群がある。また、そのほかには、朽木 量によるニューカレドニアに眠る日本人墓標の考察や日本移民の生活財を通じたライフヒストリー³⁾など、考古学の新たな手法を取り入れた移民史研究がなされている。くわえて、流刑地でもあったニューカレドニアにおけるアラブ人社会に光をあてたのが堀内正樹⁴⁾と小田淳一⁵⁾である。このようなニューカレドニアの移民に多様な視角からの探求の試みや研究蓄積は、たんに歴史研究や地域研究の域にとどまることなく、国際社会学の領野まで拡大してきている。しかし、これもごく近年のことであることも忘れてならない。

ところで、2013年に開催されたニューカレドニア日本人移民120周年祭参加のうちに、

小野健次氏と出会ったことから始まった小野弥一氏の資料整理や保存の作業はやがて、初代労働監督官小野家のファミリー・ヒストリーとしてまとめられることとなった。小野家に蓄積された資料からわかるのは、小林忠雄の研究を側面から裏付け、それを補強するものであり、新たな知見を付記するわけではないが、ニューカレドニア史研究、ひいては日本の移民研究の一助になることに違いない。

現地で開催された移民祭の記憶から、ニューカレドニアのいまを繙くには、小野弥一の足跡は十分なほどに明治近代日本の外交、その国際認識や出稼ぎ労働の送り出し要因である国内事情などに思考をめぐらすうえで貴重な示唆を与えてくれる。ここでは先達らの研究を精査しながら、資料の解題を通じて今後の研究進捗に資することをねがって文責を果たしたい。小野弥一の足跡と保存資料から興味をもったのはつぎの諸点である。①明治近代日本をとりまく国際労働力移動の背景理解である。②小野弥一を登用した榎本武揚の思惑とはなんであったのか。③労働監督官小野弥一のニューカレドニアにおける役回り。そして④太平洋で繰り広げられる国際労働力移動をどのように俯瞰することができるのか、といったことに私見を述べてみたい。2013年当時、筆者の現地訪問の印象を書き留めた拙文⁶⁾を、まずここに再録することからはじめよう。

「ニューカレドニア日本人移民120周年祭」に参加して：記憶の国境線をたどる

戦後70年近くが過ぎた。「破局の20世紀」の発端となった第1次世界大戦も再来年には開戦100年目を迎える。二つの世界戦争と冷戦のなかで生きてきた私たちにいまなお問いかけているのは戦争の記憶ばかりか、「国民国家」という名による暴力やその語り方である。いつの時代にも人の国際的な移動や越境的な人びとのつながりがあったにもかかわらず、物語の主体はいつも国民国家の歴史であり、移/植民者のライフヒストリーはその補完物にされてきた。今夏（6月26日から7月8日）、日本から7500キロ離れた仏領ニューカレドニアに鶴岡、沖縄、岐阜、和歌山から約200名の親族や移民の子孫らが集まって慰霊祭が行われ、そこに暮らす日系2・3世らと日本人移民の歴史と記憶をたどることとなった。

世界有数のニッケル産出国として名高い仏領ニューカレドニアの発展の影に日本人移民労働者の存在があったことを知る人は少ない。陽光まぶしい南太平洋の島、ニューカレドニアは『天国に近い島』といわれるが、その史実はむしろ『地獄に近い島』であることがわかる。写真作家である津田睦美（成安造形大学）さんに誘われて参加した今回の慰霊祭はジャズ・コンサートをはじめとして日系移民の人びととの交流会や沖縄芸能などさまざまなイベントが首都ヌメアを中心に市内各地で開催された。これまで埋もれていた個々の記憶が集合的記憶へと発展し、ニューカレドニアの歴史に日

本の移／植民の記憶が刻まれるであろうことを予兆させた。

ニューカレドニアへの移／植民の歴史は1892（明治25）年，フランス・ニッケル鉱山会社の要請を受けた榎本武揚外務大臣の奨励で，ニッケル採掘の露天掘り採掘夫として熊本県出身者600名にのぼる出稼ぎ労働者が上陸してからはじまる。そして，1919年までのあいだ南洋ブームに乗って「官民一体」となった送り出しが推進されてきた。沖縄をはじめとして国内各地から約7,000人が契約移民としてニューカレドニアの各地に渡ったが，その多くは農漁村出身の日本人男性であった。太平洋戦争のはじまりを契機に「敵性外国人」とされた日本人・日系移民はオーストラリアの強制収容所に分散抑留される。その総数は約4,300人であった。また敗戦後には家族が残るニューカレドニアへの帰還も認められることなく，日本本国に強制的に送還され，家族離散という戦争被害をうけてきた。

このような当事者の記憶は日本人の出稼ぎ移民労働の筆舌に尽くしがたい苦難と辛酸が移民労働者のコミュニティに存在しているばかりでなく，フランスの植民地統治，先住民差別，さらには「戦後」を問い直す絶好の機会を与えてくれている。いわば，そこには現代を照らす豊かな物語が存在しているといえよう。

近代世界は先住民社会を「未開」として否定してきた。日本もまた同様に，文明開化，近代化をへて経済成長をなしとげたが，昨年（2011年）のフクシマ原発事故によってこれまでの歩みを問いかえすにはおかれなくしている。この近代化の伏線に南太平洋があったことを忘れてはならない。近代化への反省の鏡としてニューカレドニアがある。こんな感慨を深くする旅であった。

記憶とはささやかな生活の営みを記録すること，南太平洋のしおらしい土地の文化のなかで死を考えること，苦難のなかのただ中を歩き，いくとしへるとも忘れない記録を紡ぎ，伝承することが死者の想いへと繋がる。記録に残らないひと，埋もれてしまうひとたちの記憶を語ることはけっしてむかし話ではないことを痛感する。

首都ヌメアの北の外れにヌメア市民墓地がある。白い十字架の立ち並ぶ美しい丘の墓石にはただ「日本人の墓」と記され，ニッケル鉱山労働者として移住してきた5,575名が眠っている。この墓標には声高に「日本国」「日本」を名乗るのではなく，受け入れ地である仏領ニューカレドニアに移住し，ニューカレドニア各地で西欧的な暮らしをし，戒名もなく，ただ「日本人」として死んだことが刻まれているにすぎない。「死者」たちは静かな風が吹く丘の上から海を臨み，フランボワイヤンの真っ赤な花が咲くこの島で異貌の人となったことを告げている。明治政府官僚として最初に赴任した小野弥一氏の子孫にあたる小野健次さんは，慰霊祭で「厳しい労働環境のなかで労働契約を全うし，その後もこの島にとどまった子孫が生き抜き，祖先を守り，育ててき

た絆に感謝する」と述べ、その記憶の継承を訴えた。

ニューカレドニアへの移/植民の歴史はたんに移住先での労働、生活、戦争体験などのライフヒストリーにとどまらない。もちろん、私たちの記憶にはアジア・太平洋における戦争の記憶と重なり合う。それゆえ移植民は切り離すことができない。そればかりか、広域的なヒト、モノ、資本をつうじて交差するいわば、「環太平洋日本人世界」がリアリティをもって現代世界につながっていることを再認識すべきであろう。なぜなら、便利さと豊かさの源である近代文明＝技術が同時に罪深い「収奪」の産物であるとの両義性を体現する存在として慰霊墓地があるからである。そこには移/植民と戦争という二重の歴史による惨劇と向き合う銃後の残響が記憶されていた。(了)

1892年2月7日付「官報」を掲載した『大阪朝日新聞』(3899号)には、「出稼ぎ人の着到」と題した告知文がある(図1)。「ニッケル会社代理人「ルッシエル」氏および労働者監督小野弥一、副監督荒井悌次郎をはじめ599名(1名進航中死去)が無事、チョー(原文まま、正確にはチオ)に到着した」と報じている。ここに、日本とフランス、ニューカレドニアとが世界商品であるニッケルを媒介にして結びあう歴史が始まったのである。

●出稼人の着到 去月六日吉佐移民会社より佛
領なる南洋ニウカレドニアに出稼せしむる労働
者(天草人)六百名を搭載して長崎港を解纜したる
日本郵船會社の廣島丸は航海恙なく去月廿四日ニ
ニウカレドニアのチョー港に着し翌廿五日同行の
ニッケル會社代理人「ルッシエル」氏及労働者監督
小野彌一(月俸二百五十圓)副監督荒井悌次郎(荒
井都之助氏の息月俸六十圓)の両氏等をはじめ
労働者五百九十九名(六百名の内一名進航中死去
五日死亡せしを以て一名を缺く)一同無事同港に
上陸したり夫より廣島丸は濠洲シドニーに向け航
行本月二日同港に安着せり同船航海中僅にスクリ
ュー、ブレードを一枚破損せしのみにて別段難風
もなく至極安穩なりしよし又労働者は何れも健康
にして勇みをれり去三日シドニー發の電報吉佐
會社に達したりといふ

図1 (C) 朝日新聞社 聞蔵Ⅱビジュアル
1892年2月7日 大阪 朝刊 2P

①この歴史を世界経済という視点から俯瞰すれば、経済史家である杉原薫ら編『世界資本主義と非白人労働』（1983年、大阪市立大学経済学研究叢書13）が論じるように、アジアに西欧列強の猛威を振るった19世紀は、国際的な労働力市場を大きく変容させ、非西欧世界が周辺部的労働関係に取り込まれ、インド、中国の非白人国際労働力市場が成立する期を一にするのである。さらには、日本人出稼ぎ労働を基本とする供給形態とみごとに符合している。このことから、鉱山開発労働力の確保は当時、喫緊の課題であることがわかる。増田義郎は、ニューカレドニアのニッケル開発の鉱山作業には、はじめフランスから送り込まれてきた流刑者らに負わされていたが、1883年に数百人の中国人労働者が契約移民として導入され、1892年には日本人も雇い入れられた⁷⁾と述べている。かくして、世界経済の史的展開に組み込まれた明治近代の時代背景がそこから読み取れることになる。しかも、鉱山労働の現場は場所を問わず、つねに危険で過酷な作業を伴うものであって、その移動の社会的経験は苦悩と不可分であったことが推察される。

②小野弥一の略歴からも明かなように、小野はフランス留学を経験し、官吏としての能力を如何なく発揮していた足跡が偲ばれるが、榎本武揚の外務大臣就任によって、その職務は暗転する。それは、まるで移民奨励政策に込められた榎本武揚の思惑に翻弄されるかのようである⁸⁾。小野弥一は榎本の要請をうけて会計検査院の要職から、ニューカレドニア派遣にあたって設立された日本吉佐移民会社員として任務に就くことになる。その背景になにがあったのだろうか。これは明治日本近代史を繙くうえでも興味深い。

今回いくつかの資料から垣間見えたのは、榎本の移民構想はオランダ留学の影響を受けたことにより、欧米列強と同様に植民地確保を近代国家形成の必要条件と考えていたこと、その構想は北海道開拓の延長線上にあったことである。くわえて、それを支える外務省人脈もまた、五稜郭の同志らであった。かれらによって移民が奨励され、榎本時代以後も各地の領事として尽力し、かつての蝦夷共和国の夢追い人たちが描いたシナリオ⁹⁾であったといえる。ここに日本の「南洋」イメージが形成される序曲があるともいえよう。

③小野弥一が現地到着後、ニューカレドニアで苦勞するさまは、小林の前掲論文「小野弥一伝」のなかで詳述されている。「ニューカレドニア島東海岸チヨに上陸した天草出身の邦人移民には人影もまれな荒寥たる自然は、西九州ののどかな田園風景とはあまりにも異なる環境であった。この島のニッケル鉱床は海岸にそった台地の頂上か中腹にあり、また宿舎は水の豊富な山麓の川岸にあるので、朝晩の採鉱場への通勤は急峻な坂道の上り下りが必要であった。その苦勞にまして西九州の農村の出身者には、鉱山作業が露天掘とはいえ、鉱山仕事は全くの初体験なので、ダイナマイトの爆破など危険を身近に感じ、不安のおびえ、その心情は激しく動揺していた。こうした動揺におののいている時、一部の扇動者の発言が全体の同意を得ることは容易に想像できる。（中略）山道が急坂であること、

作業が危険であるとの理由から2月8日には移民一同の決議として帰国を会社に申し出て、移民一同作業を休止し、労資間の紛糾がやがて小野総監督に非難の眼が向けられていくことになる。

ここでの小野の役回りはもはや監督、仲介者という立場を超えて、制御不能な自然と残酷さに私心なき献身性を求められたことである。植民地的ヒエラルヒーのような土地で事業者たちの熾烈な争いの場に「翻訳者／通訳者」の陥穽をみてとることもできよう¹⁰⁾。なぜなら、チオの作業現場は1,550人の多様な出自からなる鉱夫たちが作業に従事しており、しかも、その賃金体系は白人から黒人までのあいだに2倍以上の開きがある「格差社会」を形成していたと、Y. Bencivengoは記している(p.282)。鉱夫たちの不満が渦巻くなか、小野は苦渋を深めていったと推察される。

④かくして、民間移民とり扱い人会社による複雑な移民送出過程全体を見渡そうとすれば、坂口満宏¹¹⁾が指摘しているように、太平洋を挟んで左側に日本、右側の移住国を配置し、それを一つの「舞台」に見立て、日本側・移住側双方には5人の「役者」が登場することになる。日本側の「役者」とは、1、日本政府、2、府県知事・各郡町村長、3、移民会社、4、移民会社代理人、監督官、5、日本からの出稼ぎ・移民である。これにたいして、移住先には1、移住国政府、2、日本領事館、3、耕作会社、鉱山会社などの雇用企業、4、移民会社の現地代理人、5、移住先の日本人あるいはコミュニティ、これにくわえて、船便会社、銀行、移民逗留旅館ないしホテル、日本語新聞、現地社会の対日観など、さまざま要素が錯綜した移民／植民関係からなる「太平洋世界」が創出することになる。この環太平洋地域における人の国際移動は、国際環境、国内社会環境と、対外認識とが連なって多くの「役者」たちを概観することで移民研究の新たな地平が拓かれていく。

もちろん、この環太平洋世界を一望するうえでは、戦前・戦後のオーストラリアへの日本人移民問題¹²⁾が視野に入ることには変わりはない。人びとの移動経験は、さまざまな場所をつくりだす。そこで生みだされる場所は、ルーツとしての故郷だけではなく、移動の経路としての集団的移動の経験である。それがゆえに、その移動が投影するなかから新たな「文化」が創りだされることになる。移動という出来事がつくりだす物語は社会を問題化¹³⁾する。移民研究の課題がそこに明示的にしめされるばかりか、無告の民の歴史に射程を延ばすことになる。これが移民史の新たな作法のひとつであろう。小野弥一をめぐるファミリー・ヒストリーは、「近代」という時代を問い、越境する人びとの眼差しを代弁しているかのようであった。

注

- 1) 石川友紀(2008)「オセアニアにおける日本人移民の歴史と実態」『立命館言語文化研

- 究』20（1），83-92 頁。
- 2) 大石太郎（2015）「ニューカレドニアの日本人移民社会」米山 裕 / 河原典史編『日本人の国際移動と太平洋世界』文理閣所収。
 - 3) 朽木 量（2000）「生活財からみたニューカレドニア日系移民の暮らし」『メタ・アーケオロジー』2 号，64-89 頁。および同，「異邦に生きた「日本人」の死：ニューカレドニア日系移民の墓標調査から」『国立歴史民俗博物館研究報告』91 号，279-291 頁。2001 年。
 - 4) 堀内正樹（2012）「開かれた「民族」：ニューカレドニアのアラブ人村」『成蹊大学文学部紀要』47 号，95-115 頁。
 - 5) 小田淳一「天国に一番近い島に流された「アラブ人」たち」（meis2.aacore.jp/photo_essays_201107.html）（2012 年 3 月 11 日閲覧）
 - 6) 筆者が在職していた，富山大学人間発達科学部長裁量研究調査奨励によって実現した記録である。この場を借りてあらためて謝意を表したい。
 - 7) 増田義郎（2004）『太平洋』集英社。
 - 8) 高村聡史（1999）「榎本武揚の植民構想と南洋群島買収建議」『国史学』167 号，77-110 頁。
 - 9) 佐々木敏二（1989）「榎本武揚の移民奨励策とそれを支えた人脈」『キリスト教社会問題研究』（同志社大学）37 号，535-549 頁。
 - 10) 崎山政毅（2005）「「通訳者」の陥穽，あるいはプトゥマヨ・スキャンダルにおける「真実」の政治学」真島一郎編『だれが世界を翻訳するのか』人文書院。240-263 頁。
 - 11) 坂口満宏（2015）「誰が移民を送り出したのか」米山 裕 / 河原典史編，前掲書所収。
 - 12) 遠山嘉博（2005）「第二次大戦前のオーストラリアへの日本人移民の諸問題」『追手門学院大学経済学紀要』32-67 頁。
 - 13) 伊豫谷登士翁（2013）『移動という経験』有信堂。

（さとう ゆきお・富山大学名誉教授，帝京大学文学部教授・国際関係社会学）